



東京大学
THE UNIVERSITY OF TOKYO

学内広報

for communication across the UT

SEXUAL HARASSMENT

セクシュアル・ハラスメント防止宣言
男女共同参画社会をめざして



特別記事：

2005年セクシュアル・ハラスメント
に関するアンケート調査の結果

2006.3.15

No. 1332

第3回（2005年）のセクシュアル・ハラスメントに関するアンケート調査結果を報告する。

東京大学では2000年度に評議会でセクシュアル・ハラスメント防止宣言等を定め、ハラスメント防止委員会およびハラスメント相談所を設置するなどして、セクシュアル・ハラスメント（以下セクハラと略す）のない快適な環境で学び、働けるキャンパス作りに取り組んでいる。セクハラをなくすためには、ひとりひとりがセクハラについて正しく理解するとともに、男女各人の感じ方の違いやキャンパス全体の実情を客観的に捉えることが必要である。

このため、ハラスメント防止委員会のもとにアンケート調査小委員会を設置し、2005年の6月から7月にかけて、学部学生（留学生を含む）、大学院生（同）、研究生（同）、及び教職員（非常勤を含む）、合計6,250名を対象に、東京大学としてアンケート調査を行った。全体の回答状況は前2回の調査と同様に回収率4割弱で決して高いとは言えないが、ハラスメント防止宣言から5年を経過した時点における防止体制の評価ならびに今後ハラスメント防止を強化していくために大いに参考になる結果を得たと考える。

なお、アンケート調査票には自由記述を求める質問項目があり、多くの方々から具体的な事例に基づく問題のご指摘とともに、本調査についてのご意見も頂戴した。これらの欄への記入事項は厳秘を要することは言うまでもないが、時間と労力を割いてご回答いただいた回答者の信頼にこたえるためにも、また記入されたご意見を広く学内に周知させる意味からも、回答者が特定されたり、回答者に不利益が及ぶことがないように十分留意しつつ、意見の全体的な傾向について報告することとした。

調査票の設計に際してご協力くださったハラスメント相談所相談員の方々、事務担当の人事部職員課のスタッフ、データの入力・分析を担当した文学部社会心理学研究室の院生・学生、何よりも、個人的で愉快でない経験に関する質問に、貴重な時間を割いて回答してくださった学生、院生、教職員の皆さんに心から感謝と敬意を表したい。

ハラスメント防止委員会アンケート調査小委員会委員長 秋山弘子

目次

調査の概要	3
調査の結果	6
I セクハラと東大の取り組み	6
II セクハラに対する意識と対応	10
III 大学でのセクハラ経験	16
IV セクハラを「受けたことのある人」の場合	19
V 相談と必要な取り組み	33
VI その他	39
VII 自由記述のまとめ	42
資料（調査票）	51

調査の概要

1. 調査票作成

2005年4月から5月にかけてハラスメント防止委員会および同アンケート調査小委員会で調査内容の企画立案を行った。その際、東京大学ハラスメント相談所相談員の協力を得た。

2. 調査の期間

2005年6月20日から7月18日

3. 調査の対象者および数

学部学生の男女各800名（ただし1年生は対象とせず）、大学院学生の男女各800名（いずれも留学生を含む）。学生・院生は計3,200名。教員の女性は全員、男性は700名、職員（非常勤を含む）の男女各700名。教職員は計3,050名。

4. 調査の方法

郵送配布・郵送回収で、対象者自身が記入（自記式）。

5. 調査の内容

前2回（2001年と2003年）の調査結果と比較するために、原則として、第2回（2003年）調査の際に用いられた設問・選択肢を用いたが、諸々のセクハラ行為の土壌となっているジェンダー・ハラスメント（社会的性差による差別や嫌がらせ）およびアカデミック・ハラスメントの項目を追加した。

① 全員に対する質問

セクシュアル・ハラスメントの問題の認識および東京大学の取り組みの認知（問1～3）

何をセクハラと感じるか (問 4)、セクハラに対する意見 (問 5)
 セクハラ的行為への対応 (問 6)、東京大学におけるセクハラの実験 (問 7)
 被害を受けたら相談するか、相談しない理由 (問 17)
 セクハラ防止のために大学が取り組むべきこと (問 18)
 ハラスメント相談所について知っていること (問 19)
 アカデミック・ハラスメントの実験についての自由記述 (問 21)
 学生・院生の大学の外でのセクハラ実験 (学生のみ・問 22)
 セクハラやアカハラへの対処とその結果等の自由記述 (学生問 23、教職員問 22)
 セクハラやアカハラ、調査への意見等の自由記述 (学生問 24、教職員問 23)

② 大学院生、研究生、および教職員への質問

アカデミック・ハラスメントの実験 (問 20)、その自由記述 (問 21)

③ 大学でセクハラを受けたと回答した者への質問

セクハラの実験タイプ (問 8)、状況 (問 9)、場所や手段 (問 10)

セクハラを経験した時の本人の立場 (問 11)、相手の人数 (問 12)

相手の立場 (問 13)、経験したセクハラへの対応 (問 14)

相談した相手、相談しなかった理由 (問 15)、セクハラ実験の影響 (問 16)

6. 有効回答と回収率

学生：有効回答 1,143 名、回収率 36.5% (2001 年調査 38.1%、2003 年調査 33.1%)

教職員：有効回答 1,256 名、回収率 41.5% (2001 年調査 45.3%、2003 年調査 41.8%)

7. 回答者の基本属性

学生：女性 684 名(59.7%)、男性 452 名(39.5%)、その他 3 名(0.3%)、無回答 6 名(0.5%)。

課程および所属は下図の通り。

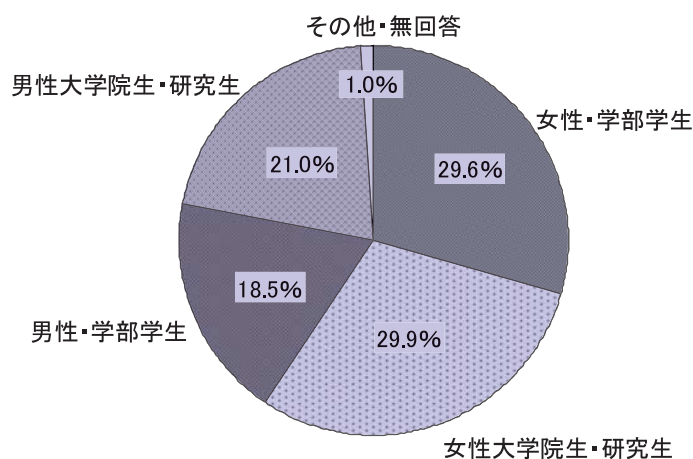


図 0-1 回答した学生の課程 (n=1, 143)

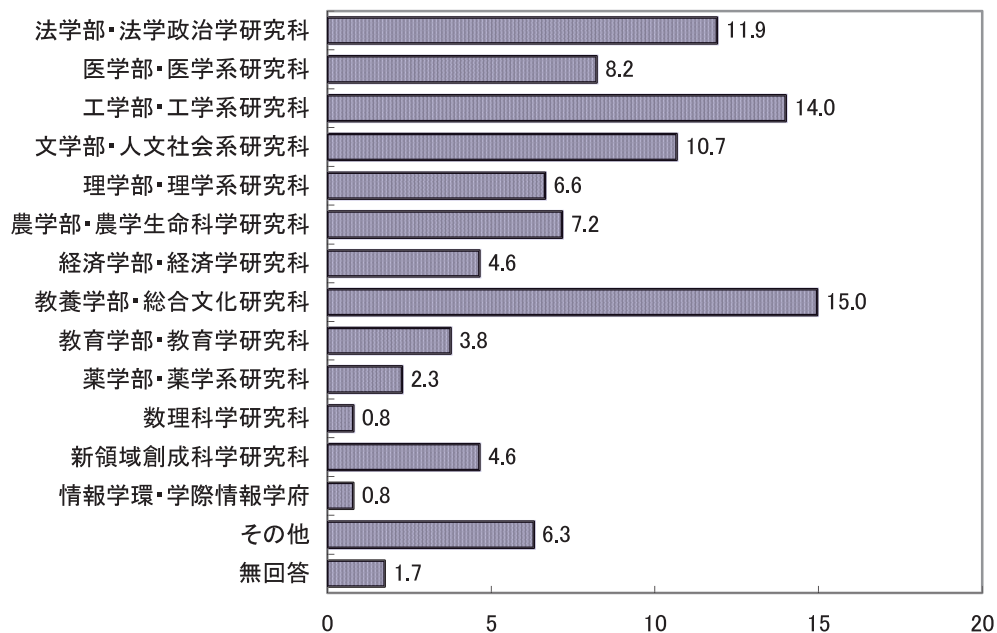


図0-2 回答した学生の所属 (n=1,143)

教職員：女性 606 名(48.2%)、男性 627 名(49.9%)、無回答 23 名(1.8%)。
職種は下図の通り。

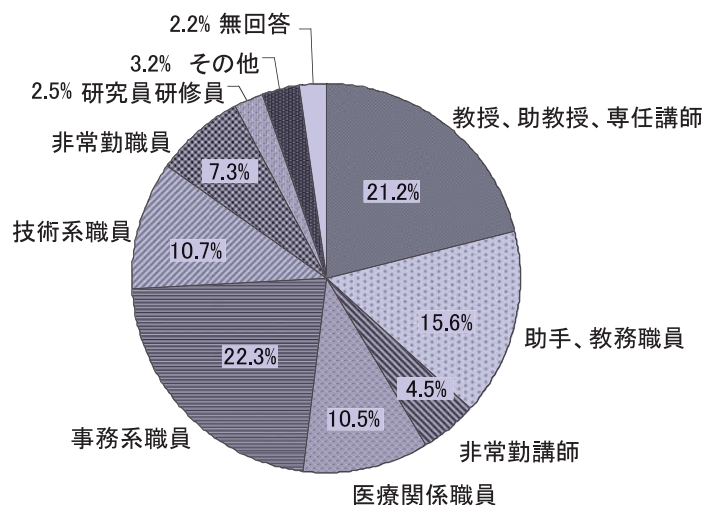


図0-3 回答した教職員の職種 (n=1,256)

調査の結果

I セクハラと東大の取り組み

1-1 大学におけるセクハラ問題の重要性 (Q1)

- ・ 学生、教職員とも「重要である」とみるものが9割。
- ・ 女性は男性より、大学院生は学部学生より、セクハラ問題を重要だと考えている。

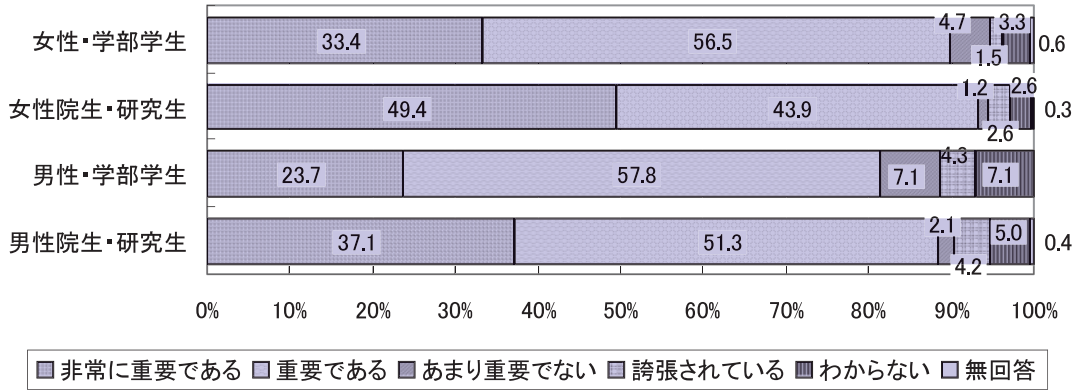


図 1-1a キャンパス・セクハラ問題の重要性 (学生)

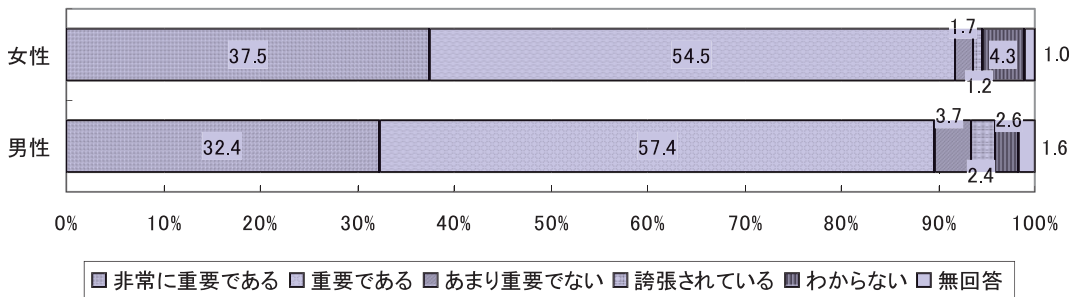


図 1-1b キャンパス・セクハラ問題の重要性 (教職員)

「非常に重要」「重要」を合わせると、学生 88.8%、教職員 90.8%に達した。3回の調査を通して、重要だと考える人の割合は、ほぼ横ばいながらも徐々に増加している。(学生：第1回調査 85.1%→第2回 88.2%→今回 88.8%、教職員：89.8%→90.2%→90.8%)

性別にみると、非常に重要であるとの回答は女性の方が多い。

学生について課程別に見ると、大学院生の方がセクハラ問題を重要視しており、特に女性大学院生は「非常に重要」「重要」を合わせると 93.3%に達するのに対し、男性学部生は 81.5%と、差が大きい。(女性学部生は 89.9%、男性大学院生は 88.4%) 教職員については、教員と職員で大きな違いは見られない。

また、学生について、文系・理系・駒場(教養学部・総合文化研究科)別に見ると、女性学生及び文系男性学生に比べて、理系と駒場の男性学生で、「非常に重要である」との回答割合が少ない(女性学生 41.5%、文系男性 44.7%、理系男性 26.8%、駒場男性 24.7%)。

1-2 セクハラ問題の情報や知識源（複数回答）（Q2）

- ・ 学生、教職員ともマスメディアが上位を占める。

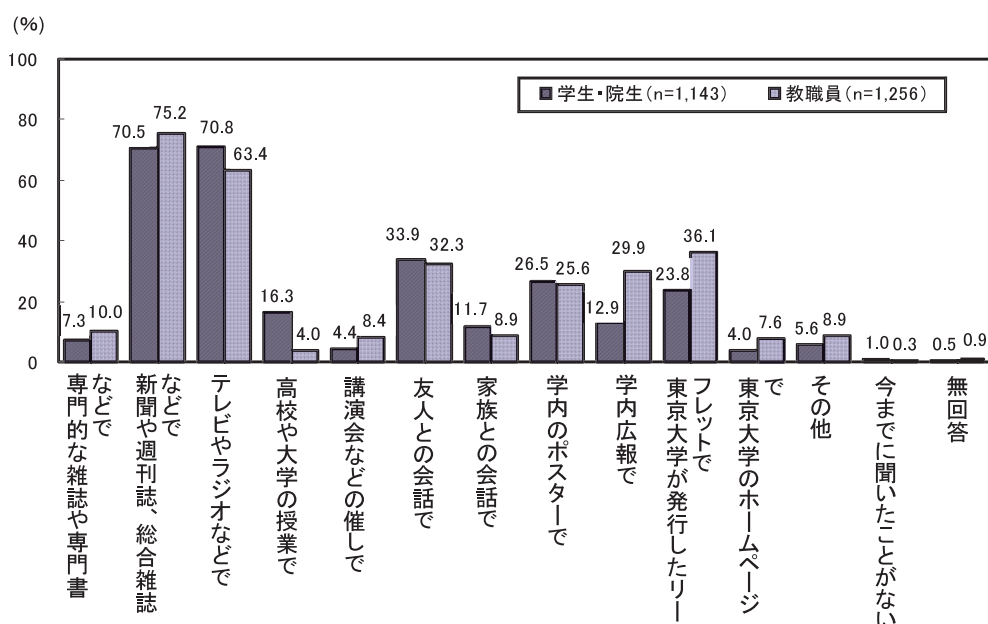


図 1-2 セクハラ問題の情報や知識源

セクハラ問題に関する情報源は、学生、教職員とも、「新聞や雑誌」「テレビやラジオ」などマスメディアによるものが多い。

「東京大学が発行したリーフレット」については、学生 23.8%、教職員 36.1%。第 1 回調査から第 2 回調査にかけて学生に対するリーフレットの効果が上がっていたが、第 2 回調査から今回調査にかけては横ばいである。（学生：第 1 回調査 6.4%→第 2 回 20.3%→今回 23.8%、教職員 28.8%→39.0%→36.1%）。

学生について、性別に見ると、女性では男性より「高校や大学の授業で（女性 19.4%、男性 12.2%）」「東京大学が発行したリーフレットで（女性 27.6%、男性 18.1%）」が多い。立場別に見ると、大学院生で「友人との会話で」が多い（学部学生 27.9%、大学院生 39.9%）。

教職員については、女性は男性に比べて「友人との会話で（女性 36.3%、男性 28.1%）」が多い。また、教員は職員に比べて「友人との会話（教員 37.2%、職員 25.8%）」が多く、「テレビやラジオ（教員 57.6%、職員 68.1%）」が少ない。

1-3 東京大学のセクハラ防止への取り組み認知（Q3）

- ・ 学生、教職員とも「知っていた」ものが 8 割以上。
- ・ 学生では女性の方が、教職員では男性の方が「よく知っていた」割合が高い。
- ・ 男子学生では、「知らなかった」人が第 2 回調査（2003 年）より増加。
- ・ 非常勤講師では「知らなかった」が 4 割。

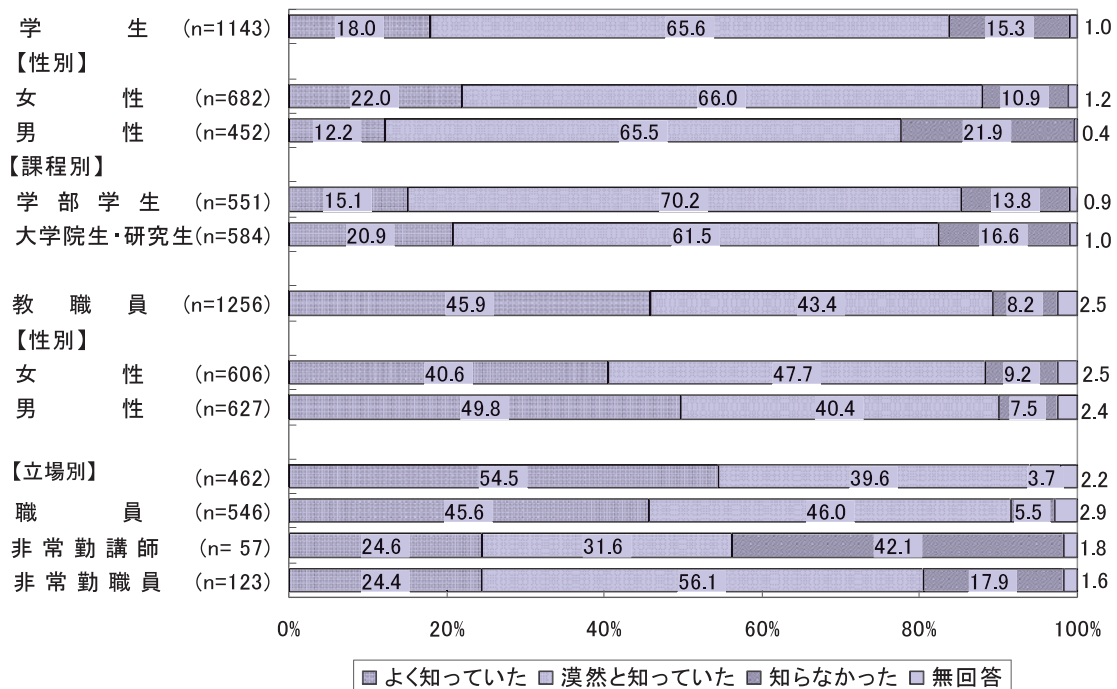


図 1-3a 東大のセクハラ防止取り組みへの認知

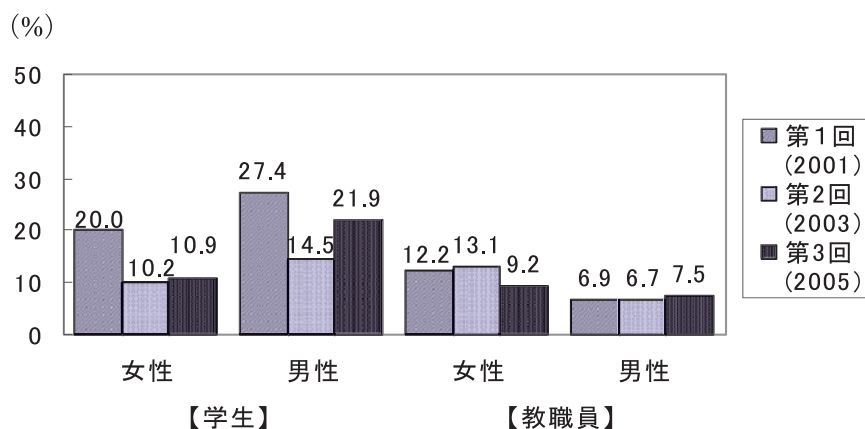


図 1-3b 東京大学がセクハラ防止に取り組んでいることを「知らなかった」人の割合

「よく知っていた」「漠然と」を合わせると、学生 83.6%、教職員 89.3%。第 1 回調査から第 2 回調査にかけて東大のセクハラ防止への認知が増加したのに対し、第 2 回調査から今回調査にかけては横這いである（学生：第 1 回 76.6%→第 2 回 88.1%→今回 83.6%、教職員：89.5%→89.9%→89.3%）。

性別に見ると、学生では、女性の方が男性より「よく知っていた」という人が多い（女性 22.0%、男性 12.2%）。特に、男性学生では、東京大学がセクハラ防止に取り組んでいることを「知らなかった」という回答が、第 1 回調査と比べて第 2 回調査では大きく減少していたが、今回調査では第 2 回調査と比べて増加していた（第 2 回調査 14.5%→今回 21.9%）。

教職員では、男性の方が「よく知っていた」という人が多く、特に職員で差が大きい（女

性職員 38.5%、男性職員 53.0%)。また、非常勤講師で「知らなかった」の多さが目立つ(42.1%)。

1-4 東大の取り組みを知ったきっかけ(複数回答)(Q3-1)

- ・ 学生、教職員とも「ポスター」「リーフレット」が多い。さらに、学生では「ガイダンス及び研修」、教職員では「学内広報」が多い。
- ・ 大学院生と駒場学生は、本郷の学部学生に比べ、「ガイダンス及び研修」が少ない。
- ・ 3回の調査を通じて、学生では「リーフレット」によって知った人が増加し、「ポスター」によって知った人が減少している。

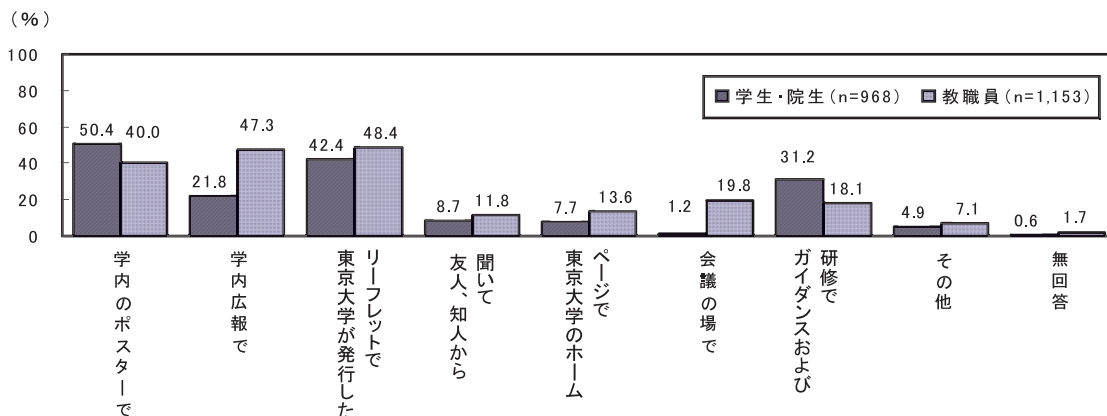


図1-4 東大の取り組みを知ったきっかけ

学生では「学内のポスター」「東京大学が発行したリーフレット」「ガイダンス及び研修」の順で、教職員では「リーフレット」「学内広報」「ポスター」の順で多かった。

学生では、教職員に比べ「学内広報」が少なく(特に女性学生 18.9%、男性学生 26.9%)、「ガイダンス及び研修」が多い。

性別に見ると、学生では、女性は男性より「学内広報」が少なく、「リーフレット」「ガイダンス」が多い。

学生について立場別に見ると、大学院生では学部学生に比べて「リーフレット(学部生 50.1%、院生 35.3%)」「ガイダンス(学部生 36.6%、院生 25.7%)」が少なく、「友人、知人から聞いて(順に学部生 3.6%、大学院生 13.6%)」が多い。文系・理系別に見ると、文系女性学生で「学内広報(14.0%)」が少ない。「リーフレット」は、男女とも、文系に比べ、理系、駒場では少ない(女性文系 56.3%、理系 41.8%、駒場 36.6%、男性文系 48.4%、理系 31.5%、駒場 39.7%)。また、駒場で、「ガイダンス及び研修」の少なさが目立つ(女性文系 44.6%、理系 34.5%、駒場 15.7%、男性文系 29.7%、理系 28.9%、駒場 10.3%)。

教職員について立場別に見ると、教員では職員と比べて「会議の場で(教員 33.0%、職員 12.0%)」が多く、「ガイダンス及び研修(順に 10.6%、28.7%)」が少ない。

過去の調査と比較すると、学生の回答では、「リーフレット」が徐々に増加している(第

1回 26.0%→第2回 39.0%→今回 42.4%)。「学内のポスター」は、第1回調査では学生の70%が回答したが、第2回調査では63.3%、今回調査では50.4%と、徐々に減少している。教職員については、回答の多かった3つは前回調査と同じであった。しかし、第2回調査では、リーフレット 54.2%、学内広報 52.0%、ポスター46.2%であり、今回調査ではどの項目も回答が減っている。

II セクハラに対する意識と対応

2-1 種々の行為をどう感じるか (Q4)

- ・ 学生より教職員の方がセクハラ問題への意識が高い。
- ・ 学生では女性の方が、教職員では男性の方が、セクハラに敏感。
- ・ 学部学生より大学院生の方が、職員よりも教員の方が、セクハラに敏感。
- ・ 「セクハラでない」とみなされた項目の上位は、「『女は愛嬌があったほうがいい』『男ならしっかりしろ』などと言う」「恋人の有無、婚姻関係、子どもの有無など私生活について尋ねる」「食事やデートに誘う」など。

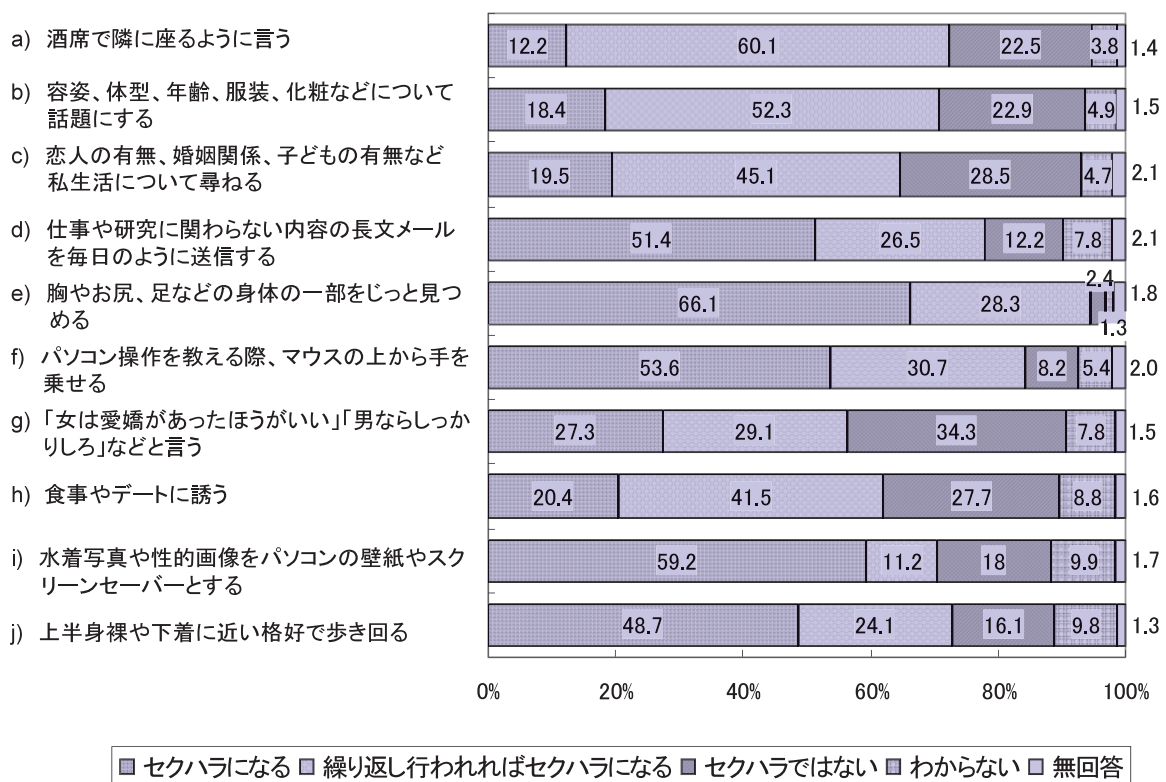


図2-1a 種々の行為をどう感じるか (学生 : n=1,143)

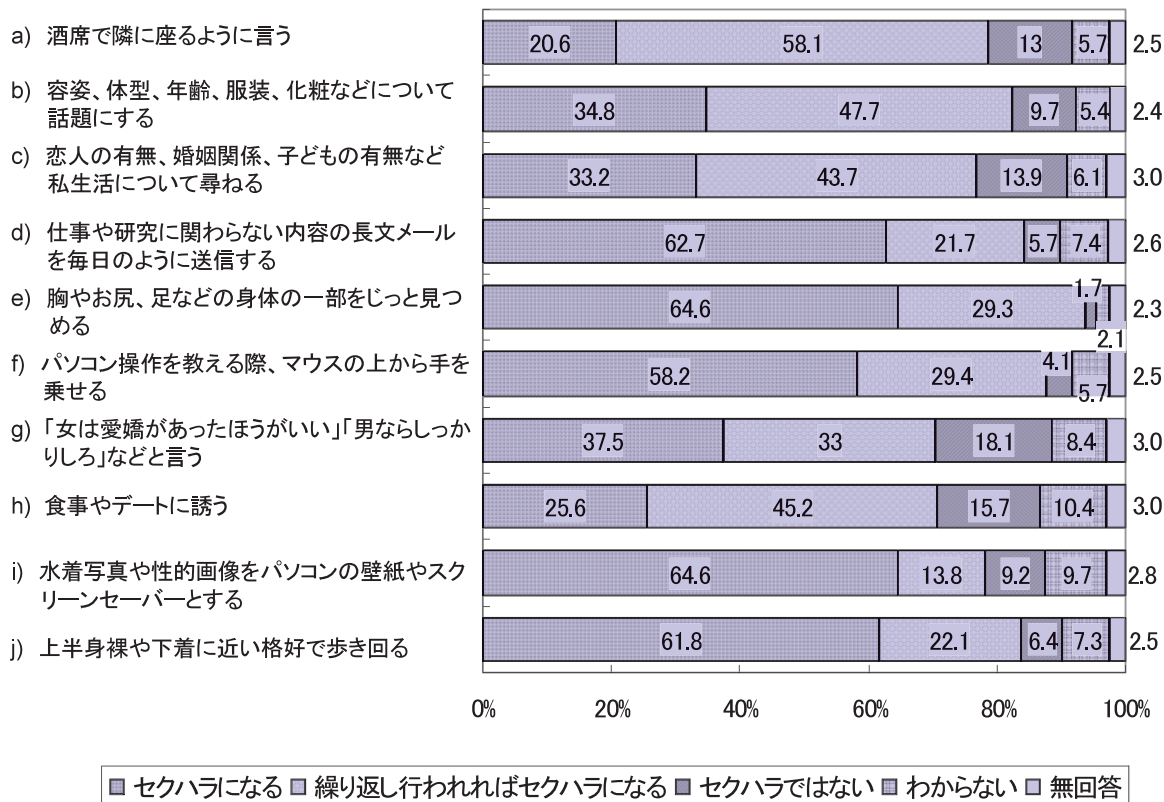


図 2-1b 種々の行為をどう感じるか (教職員 : n=1, 256)

「セクハラになる」との回答が多い項目（上位 5 項目）は、学生、教職員とも同じで、「胸やお尻、足など身体の一部をじっと見つめる（学生 66.1%、教職員 64.6%）」「水着写真や性的画像をパソコンの壁紙やスクリーンセーバーとして設定する（学生 59.2%、教職員 64.6%）」「パソコン操作を教える際、マウスの上から手を乗せる（学生 53.6%、教職員 58.2%）」「仕事や研究に関わらない内容の長文メールを毎日のように送信する（学生 51.4%、教職員 61.8%）」「上半身裸や下着に近い格好で歩き回る（学生 48.7%、教職員 61.8%）」だった。

「繰り返し行われればセクハラになる」との回答が多い項目は、学生、教職員とも、「酒席で隣に座るように言う（学生 60.1%、教職員 58.1%）」「容姿、体型、年齢、服装、化粧などについて話題にする（学生 52.3%、教職員 47.7%）」「恋人の有無、婚姻関係、子どもの有無など私生活について尋ねる（学生 45.1%、教職員 43.7%）」「食事やデートに誘う（学生 41.5%、教職員 45.2%）」であった。

全体的に、教職員のほうが種々の行為をセクハラであると捉えていた。特に、「女は愛嬌があったほうがいい、男ならしっかりしろ、などと言う（「セクハラではない」との回答：学生 34.3%、教職員 18.1%）」「食事やデートに誘う（学生 27.7%、教職員 15.7%）」「恋人の有無、婚姻関係など私生活について尋ねる（学生 28.5%、教職員 13.9%）」「容姿、体型、年齢などについて話題にする（学生 22.9%、教職員 9.7%）」「酒席で隣に座るように言う（学生 22.5%、教職員 13.0%）」の項目については、学生では 2 割以上もが「セクハラではない」と回答していた。これらの項目について、教職員では、「セクハラではない」との回答は他

の項目と比べると多いものの、学生のように目立って多くはなかった。

性別で見ると、学生については、「酒席で隣に座るように言う」「上半身裸や下着に近い格好で歩き回る」を除く全ての項目で、女性のほうが「セクハラである」との回答が多かった。特に、「胸やお尻など身体の一部をじっと見つめる（女性 72.4%、男性 57.1%）」「食事やデートに誘う（女性 26.2%、男性 11.9%）」で差が大きい。これは、第 2 回目調査と同じ傾向である。

教職員では、逆に、「胸やお尻、足など身体の一部をじっと見つめる」を除く全ての項目で、男性の方が「セクハラである」との回答が多かった。これらも、過去 2 回の調査と同じ傾向である。特に差が大きかった項目は、「容姿、体型、年齢などについて話題にする(男性 43.9%、女性 25.1%)」「酒席で隣に座るように言う(男性 27.1%、女性 13.7%)」「恋人の有無、婚姻関係など私生活について尋ねる(男性 38.9%、女性 26.7%)」。

学生について、立場別に見ると、学部生よりも院生のほうが種々の行為をセクハラであると捉えている。特に差が大きいのは、「パソコン操作を教える際、マウスの上から手を乗せる（学部生 46.8%、院生 59.9%）」「女は愛嬌があったほうがいい、男ならしっかりしろ、などと言う(学部生 21.2%、院生 33.2%)」「食事やデートに誘う(学部生 14.9%、院生 25.7%)」「仕事や研究に関わらない内容のメールを毎日のように送信する（学部生 46.8%、院生 56.2%）」。

文系・理系別に見ると、「酒席で隣に座るように言う」「恋人の有無など私生活についてたずねる」「女は愛嬌があったほうがいい、男ならしっかりしろなどと言う」「水着写真や性的画像をパソコンの壁紙などとして設定する」等の項目で、文系男性学生が理系、駒場の男性学生より「セクハラである」との回答割合が多い。

教職員について立場別に見ると、職員よりも教員のほうが種々の行為をセクハラであると捉えている。特に差が大きいのは「パソコン操作を教える際、マウスの上から手を乗せる（教員 64.3%、職員 52.9%）」「食事やデートに誘う（教員 33.5%、職員 22.1%）」「仕事や研究に関わらない内容のメールを毎日のように送信する（教員 68.8%、職員 58.1%）」「女は愛嬌があったほうがいい、男ならしっかりしろ、などと言う（教員 43.3%、職員 34.2%）」で、これは、学生と院生での差が大きかった前述の 4 項目と同じ項目である。

2-2 セクハラに関する意見 (Q5)

- ・ 能力・適性の男女差や「らしさ」を認める意見を肯定する人が多い。
- ・ 多くの項目で、男性の方が女性より、また学生の方が教職員より肯定が多い。特に、能力・適性の男女差を認める意見や冤罪への懸念などの項目で差が大きい。
- ・ 学生では、理系男性学生に、多くの項目で肯定が多い傾向。
- ・ 過去の調査と比べて、「できればセクハラなどの問題には関わりたくない」と考える人が、特に学生で増加している。

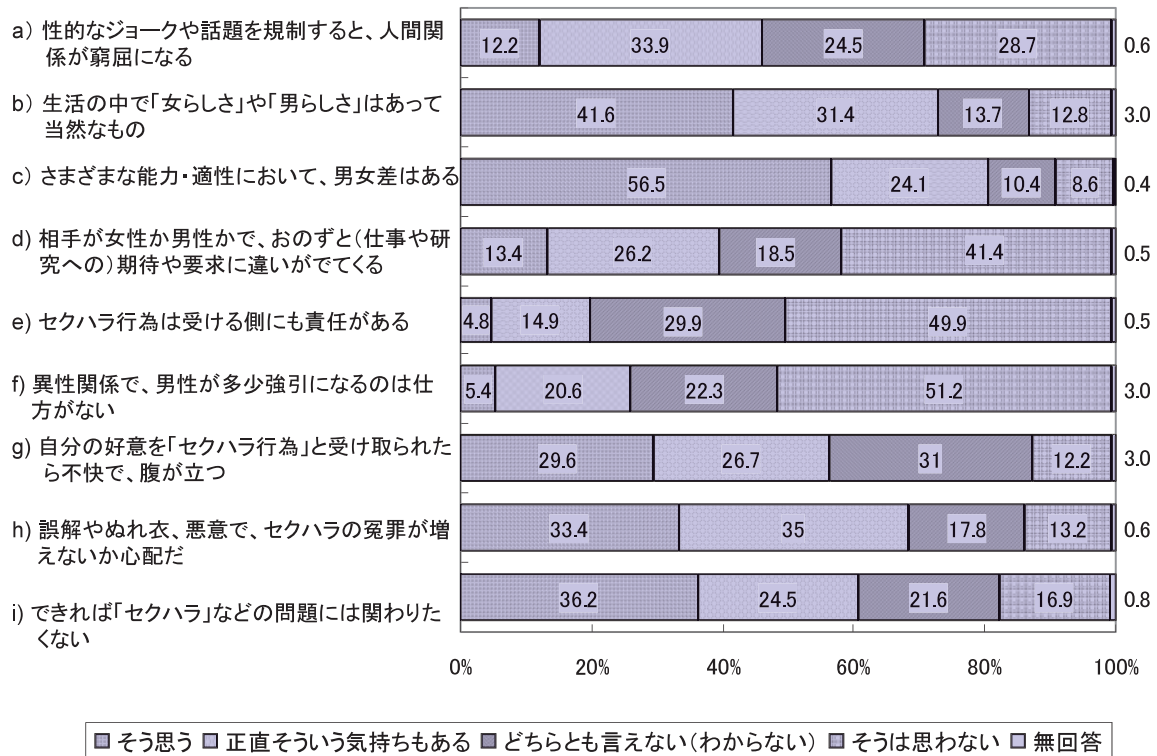


図 2 - 2 a セクハラに関する意見 (学生 : n=1, 143)

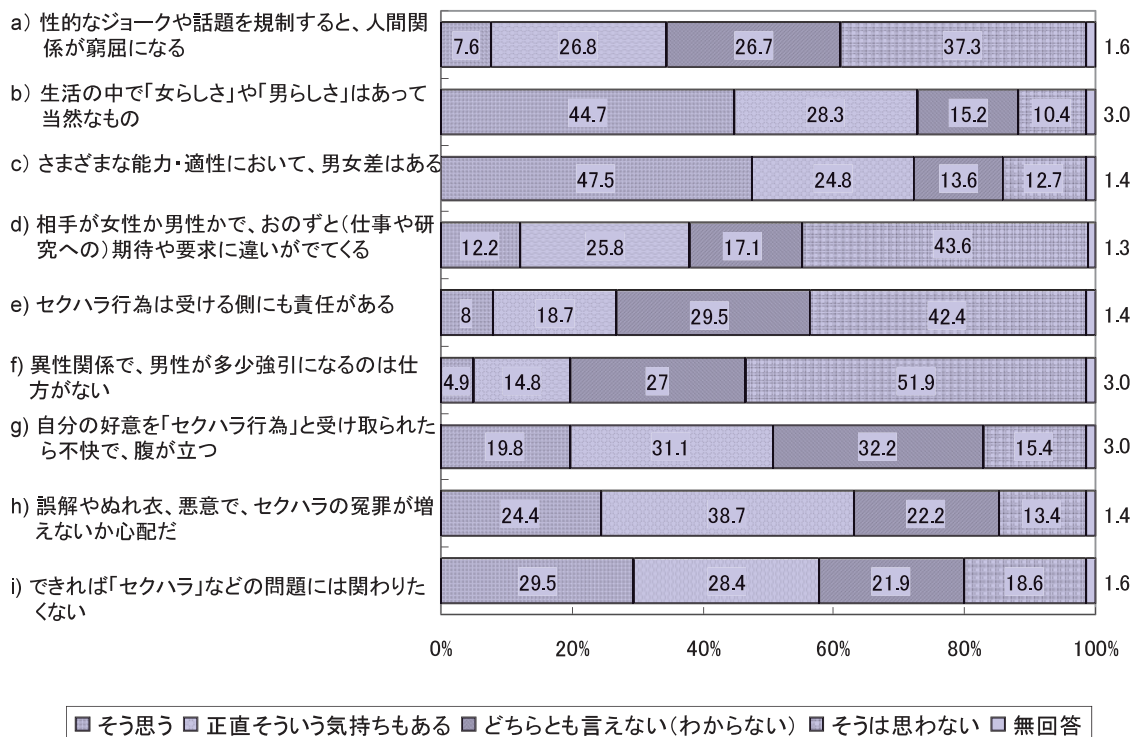


図 2 - 2 b セクハラに関する意見 (教職員 : n=1, 256)

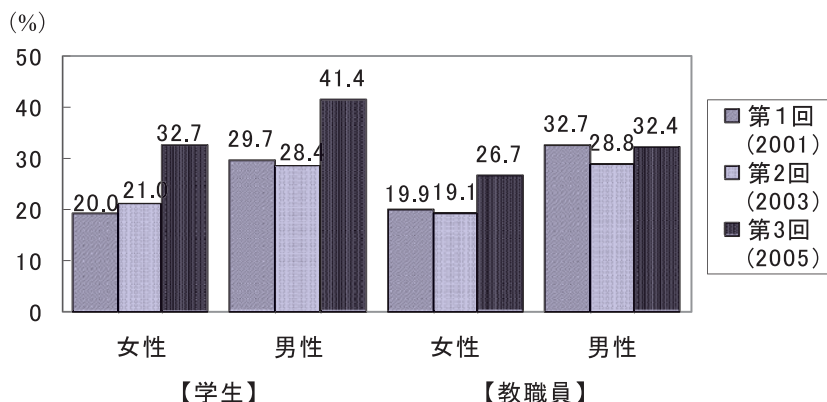


図2-2C 「できれば「セクハラ」などの問題には係わりたくない」と思う人の割合

この設問において、「そう思う」の回答が多かった項目は、学生、教職員とも、「さまざまな能力・適性において、男女差はある」「生活の中で女らしさや男らしさはあって当然」だった。これは、過去2回の調査と同じ傾向である。

多くの項目で、学生の方が教職員より「そう思う」の回答が多い。特に、「自分の好意をセクハラ行為と受け取られたら不快で、腹が立つ」「さまざまな能力・適性において男女差はある」「誤解やぬれ衣、悪意で、セクハラの原因が増えないか心配だ」で差が大きい。

「そう思わない」との回答が多かった項目は、「異性関係で男性が多少強引になるのは仕方がない」「セクハラ行為は受ける側にも責任がある」「相手が女性か男性かで仕事や研究への期待や要求に違いが出る」。

性別に見ると、多くの項目で男性の方が「そう思う」の回答が多く、特に学生で男女差が大きい。差の大きかった項目は、学生、教職員とも「誤解やぬれ衣、悪意でセクハラの原因が増えないか心配だ（学生：女性 21.7%、男性 51.1%、教職員：女性 14.7%、男性 33.5%）」「能力・適性の男女差（学生：女性 48.7%、男性 68.6%、教職員：女性 43.7%、男性 51.5%）」「生活の中で女らしさ男らしさはあって当然（学生：女性 35.6%、男性 50.7%、教職員：女性 39.8%、男性 49.6%）」。

学生について立場別に見ると、男性学部生で「性的なジョークや話題を規制すると人間関係が窮屈になる（21.8%）」「相手が女性か男性かでおのずと期待や要求に違いが出る（21.8%）」の項目に「そう思う」の回答が多い。文系・理系別に見ると、理系男性は、文系男性及び女性と比べて、全体的に「そう思う」の回答割合が多い。特に、「女らしさ男らしさはあって当然（理系男性 57.5%）」「能力・特性の男女差（76.4%）」「できればセクハラなどの問題には関わりたくない（46.5%）」の項目で差が大きい。

教職員について立場別に見ると、女性では、職員は教員より「生活の中で女らしさ男らしさはあって当然（女性教員 33.5%、女性職員 43.5%）」「能力・適性の男女差はある（女性教員 36.4%、女性職員 48.6%）」が多い。

第2回調査と比較すると、特に学生で、「できればセクハラなどの問題には関わりたくない」と思う人が増加している（学生：第1回 23.3%→第2回 23.8%→今回 36.2%、教職員：26.8%→24.1%→29.5%）。

2-3 セクハラを受けた場合にするか (Q6)

- ・ 「話題への不快感」「望まない誘い」に対しては、はっきり意思表示・抗議する割合が低い。
- ・ 女性では男性と比べて婉曲的な対応が多くなる。
- ・ 前回の調査と比較して、全体的にはっきり意思表示・抗議する割合が減少している。

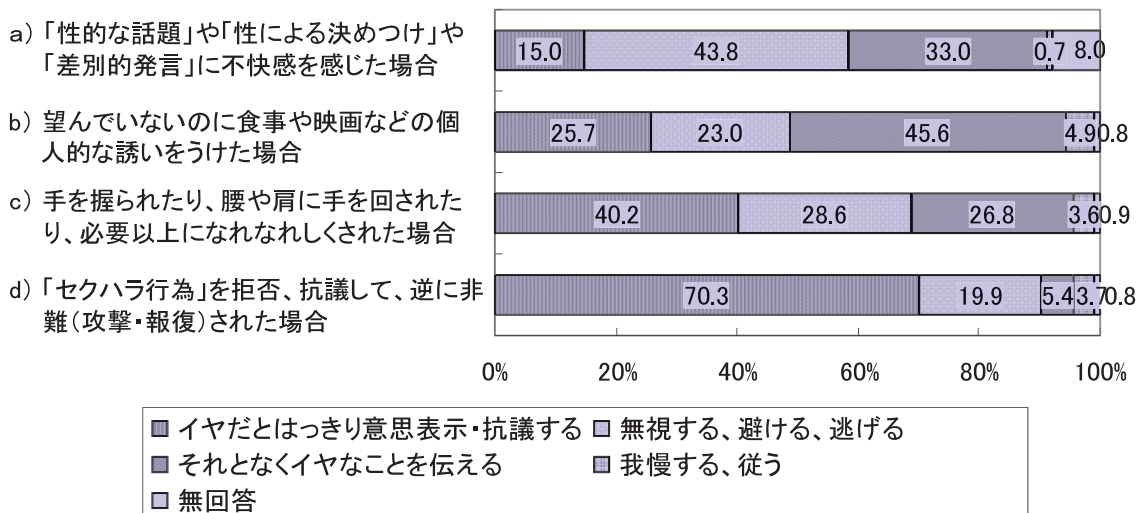


図 2-3a セクハラを受けた場合にするか (学生 : n=1,143)

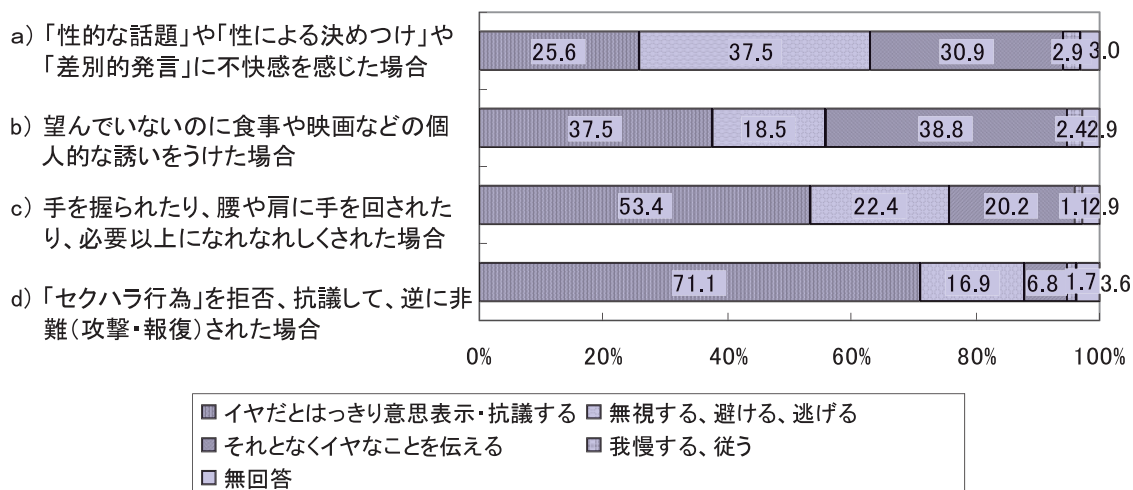


図 2-3b セクハラを受けた場合にするか (教職員 : n=1,256)

学生、教職員とも、「性的な話題や性による決めつけや差別的発言に不快感を感じた場合」には「無視する、避ける、逃げる (学生 43.8%、教職員 37.5%)」が最も多く、「望んでいないのに食事や映画などの個人的な誘いをうけた場合」には「それとなくイヤなことを伝える (学生 45.6%、教職員 38.8%)」が、「手を握られたり、腰や肩に手を回されたり、必要以上になれなれしくされた場合」「セクハラ行為を拒否、抗議して、逆に非難された場合」には、「イヤだとはっきり意思表示・抗議する (前者 : 学生 40.2%、教職員 53.4%、後者 :

学生 70.3%、教職員 71.1%)」が最も多い。

性別に見ると、全体的に、男性の方が「イヤだとはっきり意思表示・抗議する」の割合が多く、女性の方が男性より「それとなくイヤなことを伝える」の割合が多い傾向が見られる。

また、全体を通して、セクハラを受けた経験のある人は、ない人より、イヤだとはっきり意思表示する割合が少ない傾向がある。

以上の結果は、過去 2 回の調査と同様の結果である。しかし、学生、教職員とも、前回の調査と比較して、全項目を通して、「イヤだとはっきり意思表示する」の割合が減少し、「それとなくイヤなことを伝える」が増加している。(特に、「性的な話題や性による決めつけや差別的発言に不快感を感じた場合」「望んでいないのに個人的な誘いをうけた場合」の 2 項目については、3 回の調査を通してこの傾向が見られる。)

文系・理系別に見ると、全体的に、理系女性学生は、文系や駒場の女性学生に比べて「イヤだとはっきり意思表示する」の回答割合が多い。

Ⅲ 大学でのセクハラの実験

3-1 東大、またはそれに準じた場でのセクハラ経験 (複数回答) (Q7)

- ・ 学生、教職員とも、「言葉で」が最多。
- ・ 学生では「不快な性的行為」、教職員では「性別役割の強要」が多い。
- ・ セクハラを受けたことのある女子学生は40%(男子学生は8%)、セクハラを受けたことのある女性教職員は38%(男性教職員は7%)であった。
- ・ 過去の調査と比べて、セクハラ経験者は減少している。

(1) 学生の場合

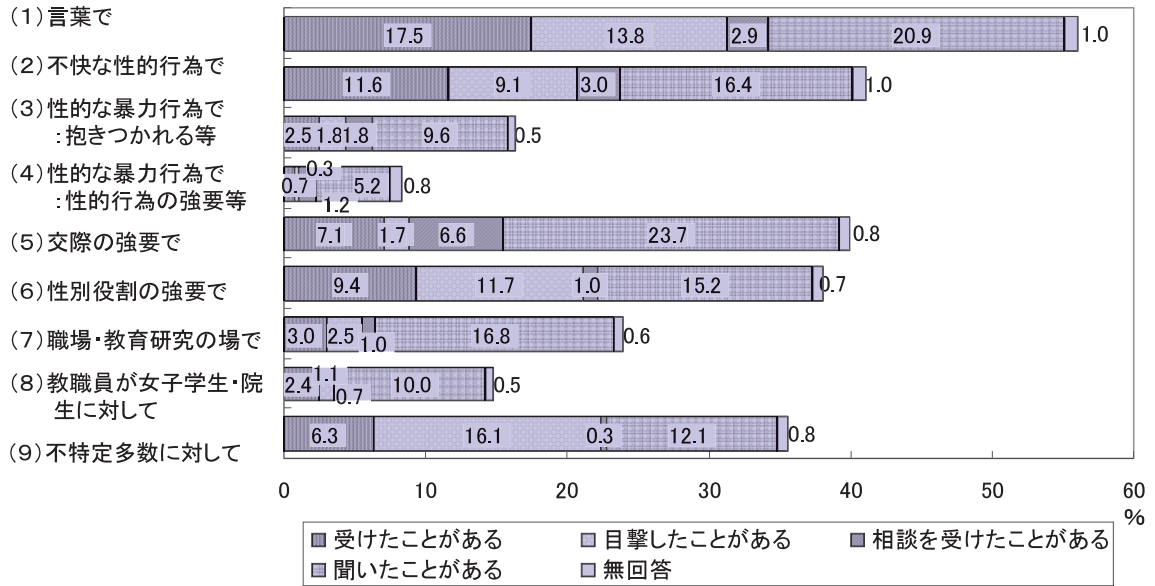


図3-1a 学生のセクハラ経験(男女含む) (n=1,143)

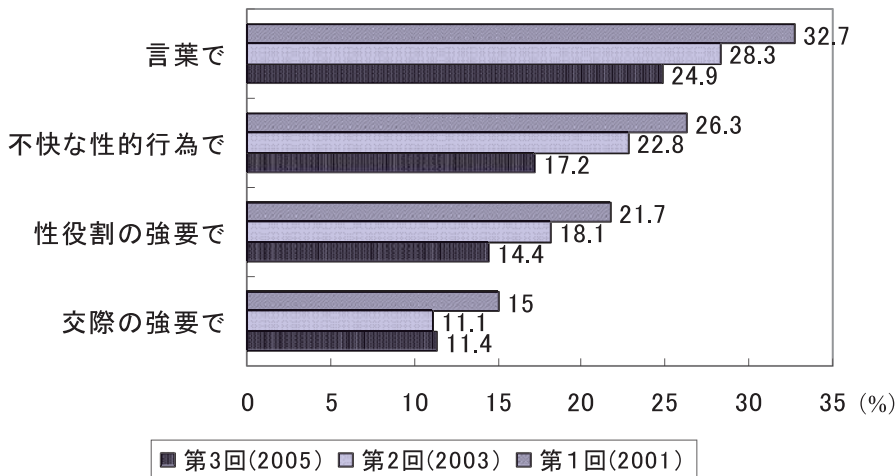


図3-2a 女子学生のセクハラ経験の変化(セクハラ経験の多かった4項目)

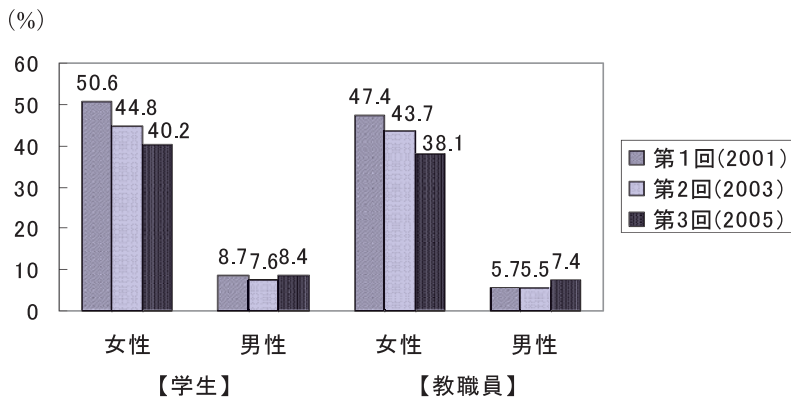


図3-3 セクハラを受けたことのある人の割合

学生からはのべ692例のセクハラの実績があった。女性（回答者682名）では、受けたことのあるセクハラは、多い順に、「言葉で（170例、24.9%）」「不快な性的行為で（117例、17.2%）」「性別役割の強要で（98例、14.4%）」「交際の強要で（78例、11.4%）」であった。これらは、第2回調査と同じ項目であるが、過去2回の調査を通して減少している。

セクハラを受けたことがある人の絶対数は、女性274名(40.2%)、男性38名(8.4%)だった。第2回調査では、セクハラを受けたことのある女性学生は約44.8%であり、今回調査では減少している。

文系・理系別に見ると、理系では文系と比べ、わずかにセクハラ経験が多い傾向がある。

(2) 教職員の場合

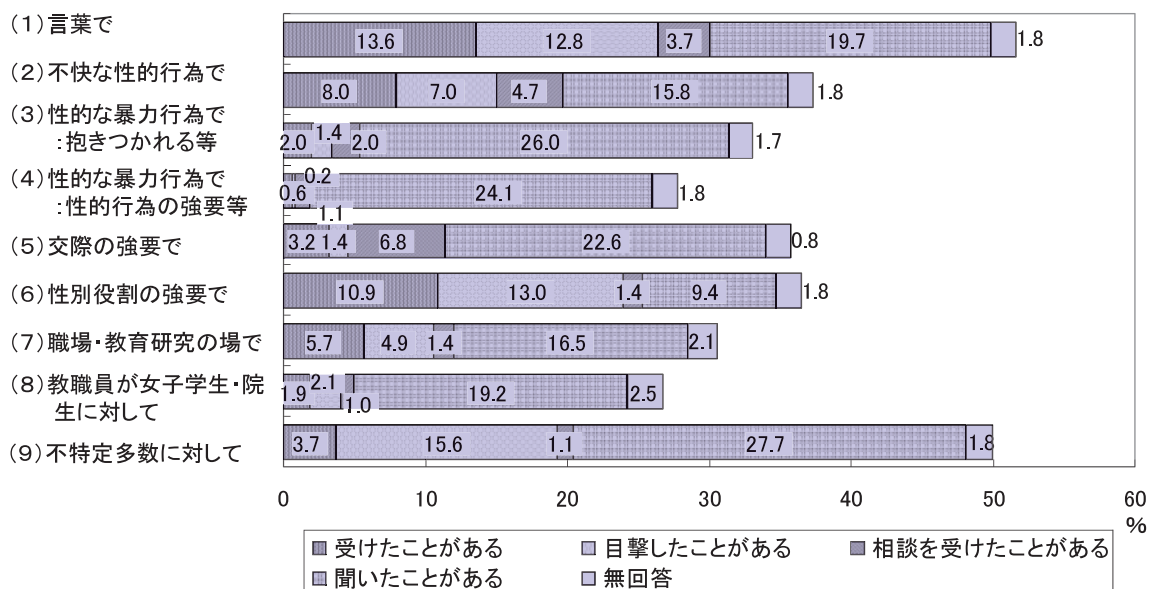


図3-1b 教職員のセクハラ経験（男女含む）(n=1,256)

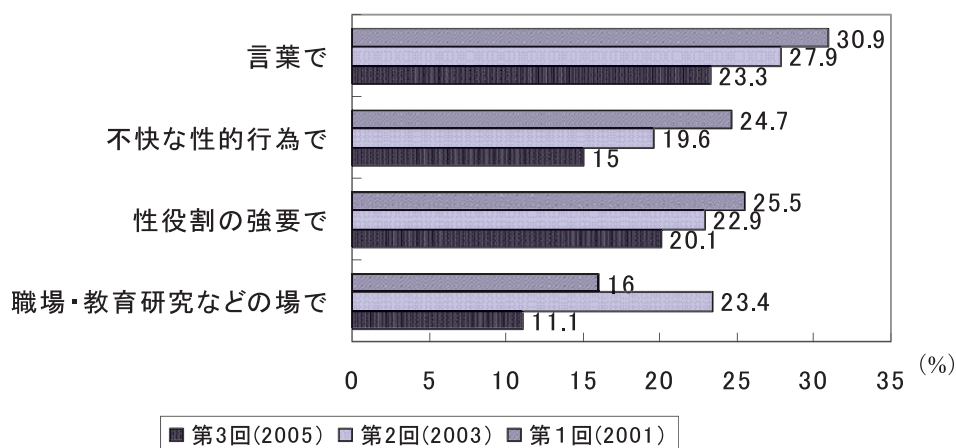


図3-2b 女性教職員のセクハラ経験の変化（セクハラ経験の多かった4項目）